

平成27年6月10日号 (第150回)

阿伎留通信

公立阿伎留医療センターは、医の心を重んじ、患者の生命と健康と
生活の質を考える良質の医療を実践し、地域医療の最適化に努力します。

今回の阿伎留通信は、「無痛分娩」について産婦人科部長 井上 千賀子医師よりお話をさせていただきます。

あなたらしいお産をめざして

無痛分娩について



つわりの洗礼を受け、やっとそれを克服した後、食欲全開、自分のお腹がみるみるふくれてくる。胎児の発達、胎動が初めて感じられた時の驚きと喜び・・・妊婦さん達は長い妊娠生活を過ごす中、たくさんの身体の変化に対応していかなければならず、また順応していきます。

そんな中、誰でもが願う事は無事に我が子が育ち、生まれますように、安産、そして苦しみが少しでも少ない分娩の方法です。

硬膜外麻酔による無痛分娩

無痛分娩の歴史をさかのぼると、それに大きく貢献したのがビクトリア女王の第8王子のお産でした。その際、女王は英国の医師ジョン・スノーによりクロロホルムの投与を受けました。エーテルの全身麻酔が発明されてから、わずか7年目のことでした。その後、多くの医師達の思考錯誤を経て、母体の意識消失を伴わず、胎児に影響のない現代の硬膜外麻酔による無痛分娩が可能になりました。

1990年ワシントン大学教授 Bonica (ボニカ) は、彼の妻 Emma (エマ) が長女の出産の時、気道トラブルで死にかかり、Bonica が救命処置をして一命を取りとめました。そのことが契機となり、安全な鎮痛剤と母児のケア向上を追求し始めたとされています。

アプガールスコアで有名な Virginia Apgar (バージニア・アプガー) は新生児の蘇生という領域を開拓した人ですが、産科麻酔の先駆者でした。

世界中の多くの医学者の追及の中で、手術の麻酔に用いられてきた硬膜外麻酔が妊婦にも応用され、現在では分娩の鎮痛法の中心となりました。最近の米国のデータでは、全米の妊婦の2人に1人が硬膜外無痛分娩を受けていると推定されています。ヨーロッパのみならず南米諸国でも多くの人々に喜ばれているお産のスタイルです。ただ、日本では、まだこの分野では遅れをとっていて、無痛分娩ができる病院、施設はごくわずかです。それは、日本での産婦人科医の絶対数不足が第一に挙げられます。特に女医の数が今まで少なすぎた事は、大きな原因要素です。又、その中で比較的高度な技術と知識を必要とする硬膜外麻酔のできる産科医が非常に少数に限られていることがあります。昔のように、じっと耐えるしかなかった大和撫子達も、今、女性としてはっきりものが言える世の中になり、情報も積極的に個人の意思で取り入れられる時代、お産はつらいもの、痛くて苦しいものという概念を脱却すべく、安全で効果的な鎮痛ができる無痛分娩への関心と要望が高まってきているのは必然とも言えます。

無痛分娩とは

子宮収縮や子宮口の開きに伴う痛み、分娩時の痛みは脊髄からの神経により支配されています。その神経を局所麻酔薬でブロックするのが硬膜外麻酔です。これによりお産の痛みを1/10以下に減らすことができます。分娩時の体力の消耗を少なくし、産後の体力回復も早くなります。お産の経過にできるだけ影響せ

ずに痛みだけを取り除く、本来、硬膜外麻酔は分娩の鎮痛法というように理解していただければよいと思います。母体のお臍から下の感覚を鈍くする区域麻酔であり、意識は、はっきりしており、分娩の全ての経過を母親はゆっくりと味わうことができます。もちろん自分でいきみ、出てきた我が子の第一声を聞き最高の瞬間を余裕をもって、しっかりと感じとることのできる素晴らしいお産の方法なのです。精神面でお産のストレスは、最少に抑えられます。

高血圧症候群で血圧をコントロールしたい場合も威力を発揮します（硬膜外無痛分娩は妊娠高血圧症の妊婦で子宮血流を増加させることがわかっているので児にとっても、有用です）。骨盤の筋肉を弛緩させることで、分娩の進行が促されることが多く、高齢出産の場合の軟産道弛緩にとっても有効です。

その他、骨盤腔の狭い方など医学的適応となりますが、ハイリスク群に入る可能性が大きいと判断される妊婦さんには積極的に無痛分娩をお勧めします。それは無痛分娩がより安全で、又緊急時には時間のロスなく硬膜外麻酔をそのまま利用して帝王切開に移行することが可能だからです。ドラマチックな変化も瞬時に起こり得る産科の臨床では、いつでもこの時間のロスなく、母体と胎児の救急に対応できることは大事なのです。

無痛分娩の光景

無痛分娩進行中の分娩室には穏やかな空気が漂っています。そこはテレビや映画の分娩シーンのように切羽詰ったうめき声、痛みによる悲鳴をあげる妊婦さんはいません。分娩進行中でも音楽を聴いたり、リラックスできるDVDを観たり、うたた寝をしたり、付き添いの夫君とおしゃべりをしたりとゆったりとした雰囲気です。分娩も後半に差しかかると、優しい助産師の指導のもと一生懸命、いきみの練習が始まります。最後のいきみでベビー誕生、その産声と共に湧きあがる喜びの歓喜。医師、助産師、スタッフに囲まれ、皆の祝福を受け感動の涙を浮かべながら手を取り合い喜ばれるパパとママの姿は微笑ましい限りです。感動のあまり、ベビーをカメラにおさめる事も忘れてしまうパパもいます。お産直後に“先生、こんなに楽で素敵なお産なら、私、又すぐ次の子をつくりたいわ。先生、待っててくださいね”とおっしゃるママ達が多いのも頷けます。

そういう産婦人科医の私も、昔、学生結婚、選んだ産婦人科の職業柄、自然分娩を知らなくてとはと挑んだ長女のお産、我が子を取り上げて下さった教授には素晴らしいお産だったねと褒められましたが、こんな苦しい痛みがあるのかしら、もういい！陣痛よ、二度と私を襲ってこないで、ストップして！誰か助けてと心の中で叫びました。ああもう一度この痛みがきたら私の意識はなくなるかもと思ったその直後にオギャーと元気に長女が産まれました。

今でこそ、思うことですが、来世において出産を控えた私がいるとしたら、躊躇せずに無痛分娩を選ぶことでしょう。

全てのお産にリスク0%はない

自然分娩も含め、どんなスタイルのお産にもリスク0%という保障はありません。

無痛分娩は高度な医学的知識と技術、そして、豊富な経験を持った産科医師、助産師、スタッフ達が揃って始めて可能なお産のスタイルです。

公立阿伎留医療センターでのお産

当医療センターには、この春より長年、無痛分娩に携わり、この10数年だけでも3500～4000人以上の無痛分娩を手掛け、見守り、介助してきた私と経験豊かな助産師がスタッフとして産婦人科医療に加わりました。

新しい地域医療活性の一端を担うべく、私達医療スタッフ全員、日々勉強、研修、努力を重ねております。安心、安全、優しいお産をめざして、皆様方の良きサポーターとしてお手伝いしたいと考えております。



阿伎留通信については、第1回から最新号まで、公立阿伎留医療センターのホームページで御覧になることができます。ホームページアドレス(<http://www.akiru-med.jp>)